

本多弘之

honda hiroyuki

宗教心と根本言

1

宗教心という言葉には、人間に起こる意識の一つではあるが、他の言葉では言い当てられない不思議な意識という面がある。その特質には、第一に有限ではない対象、すなわち理性の対象になる事柄や内容ではなく、理性では解釈できない不可思議な事象に関わるということがある。だから、神とか靈魂とか、人間の理性では解釈不可能なさまざまな存在

への、祈りとか恐れとか感謝の思いとかとして、人間社会に他の動物にはない営みを起こすのが宗教の生活だとされるのである。

そういう宗教一般に対して、仏教は大きく方向を異にするところがある。人間の意識に自我執着という独自の意識作用（それを無明むみやうと言う）があり、それからの自覚的な立ち直りを教えるの本質とするからである。その執着

すなわち「無明」を自覚し、その支配を払いのけ、いわば無明の意識の病を治すことで、人間が本来の自己を取り戻すことを求めよと教えるのである。だから、安田理深は「宗教の終わるところに、仏教が始まる」と、仏教の独自性を表現したのである。すなわち人間の迷妄性からの解放と独立を、仏教の本質であるとされたのである。



こういう内容のことはわかっていたのであるが、明治時代の求道者・清沢満之は当時まだ新しかった「宗教」という翻訳語を用いて、真宗の教えを解明しようとした。『宗教哲学骸骨』や『他力門哲学骸骨試稿』に代表される彼の思索は、西洋の近代思想と対峙せざるをえなかった日本近代の思想状況に依じている。そこにおいて彼は、宗教心とは何かということをも、有限・無限の語で解明しようとした。

言うまでもなく有限とは、人間存在のことであり、仏教一般では「衆生」とか「有情」と言い、浄土教では「凡夫」という語で馴染んできたのであるが、清沢はそれを哲学あるいは数学の概念である「有限」という語で考察しようとした。また、仏教一般では、仏陀とか如来、涅槃とか真如などと表現されてきた仏教の究極的な「さとり」の事態を、「無限」と表現したのであった。

この言葉は仏教の言葉や話に馴染んだ耳には、抽象的な概念に聞こえたであろうが、近代日本が文明化していく時代にあつては、むしろ市民一般の思想状況に訴えていったのだと思う。かくいう筆者も、初めて仏教の学びに入門したころには、清沢のこういう言葉と思想なら、取り付きやすく考えやすいと感じたものであった。

その清沢満之は、有限と無限との関係をさ

まざまに提示したのだが、この二者の関係は、根本的には矛盾すると表現した。それは有限にとつては、無限は自分の外部に有り、無限からすれば有限は無限の内にある。これが有限と無限との根本撞着であるとされたのである。このことは、従来の浄土仏教の表現で言うなら、凡夫はどこまでも罪惡深重であり、自力では決して菩提（さとり）に到達できない（有限にとつて無限が外にある）のだし、それにもかかわらず大悲は憐むことなく常に照らしてわれら衆生を撰取して捨てない（有限は無限の内にある）ということである。

この矛盾をわれら有限者は、有限の側から、その精一杯の努力や長い年月の営為で克服しようとする。これが有限の有限たるところではある。しかし、有限はあくまでも限定された能力や時間しかもち合わせていないのであるから、無限には決して到達できない。しかし、そこに無限の側からの、何らかのはたらきかけがあるなら、有限の限界において無限が現前するということもありうるのである。これを有限の根底に無限があるからだと考えて、その根底の無限に目覚めるべく、有限の側の営みを行う立場を、清沢は「自力門」と言い、有限の外に無限が有るとする立場を、「他力門」と押さえた。

清沢の最初の著作である『宗教哲学骸骨』においては、一応、この二門はいずれを選ん

でも良いかのごとくに表現されている。これに對して、その後の思索の記述である『他力門哲学骸骨試稿』（これは著作ではなく、ノートとして残されている）は、明らかに「他力門」を清沢満之自身が選び取つて考察している節がある。

言うまでもなく、他力門の教えを徹底的に明白にしたのは、親鸞であった。その親鸞も初めは聖道自力の教えの立場（比叡山延曆寺の天台宗）から出発して、他力の教えである真宗（この三国伝承の教えを、源空が日本に開いたと親鸞は言う）に帰入したのである。有限の側からは、常識的には有限の努力で宗教心を実現できると考えるから、この次第は至極当然なのではあるが、有限の努力は所詮「自力無効」の嘆きに帰着するほかない。しかし、清沢はその帰着までの努力を、他力に納得するまでは「ずいぶん骨が折れた」と表白している。悪戦苦闘の自力の努力が、自身にとつては無効であると本当に氣づくには、その道筋を解き明かして来た伝統の教えとの出遇い、そしてそれを文字どおり体解している先達との値遇が必須なのである。親鸞はこの値遇の困難性を「難中之難無過斯」と押さえているのである。

（ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長
近著に「新講 教行信証―行巻―」樹心社